

# 近代期の和歌山県における観光地の 形成とその背景

神田 孝治

和歌山大学経済研究所

2008年

# 目 次

はじめに	1
<b>第1章 観光地と都市</b>	2
1) 和歌山県における観光地と都市の関係性	2
2) 白浜温泉の形成	7
<b>第2章 観光地と国立公園</b>	12
1) 吉野熊野国立公園の指定と観光	12
2) 和歌山県における国立公園（候補地）とその政治性	15

## はじめに

本研究は、近代期の和歌山県下の観光地の形成について、関連する背景に注目しながら検討することを目的としている。特に、近代観光を考える上で重要となる、都市との関係性や国立公園の成立に焦点をあてて考察することにする。

観光地と都市の関係性については、J.アーリの「観光客のまなざし」に関する議論<sup>1)</sup>から考察の手がかりを得ることができる。彼は、観光客が普段の日常とは違うものを求めるまなざしを有していることを論じており、そこから観光地の魅力とは観光客の日常との差異によって生み出されていると考えることができる。そして多くの観光客にとっての日常の空間とは、産業革命以降、工業化により多くの労働者を吸収して成長した近代都市が想定される。こうした観点から、観光地について検討する際には、しばしばそれと対比される都市との関係性を考える必要があるのである。

このように都市に注目して観光地を考察する場合には、その非日常性ばかりでなく、日常性についても検討することが重要となる。観光地とは、非日常の空間であることが求められる一方で、快適で安全に観光できるように、そこには日常性が入り込んでいるからである。すなわち、非日常性と同時に「環境の泡」<sup>2)</sup>などと表現される日常性も有し、半日常といえる性質を持った空間が観光地なのである。そこで本研究では、観光地と都市との関係性を考えるにあたって、互いの差異ばかりでなく同質性にも注目して検討することとする。またもう一つの着眼点として提起した国立公園の指定とは、近代期の観光政策として最も重要なものであり、かつ観光地の成立に大きな影響を与えたものである。この国立公園は自然の風景地が選ばれ、一面においては都市と対比される非日常性という考えで理解できるものである。しかしながら、国立公園選定の意義の第一は観光振興ではなく、戦前期に政治的に重要視されていたナショナリズムの高揚であり、さらに戦時体制下においては国民の身体鍛錬が考えられるようになっていた。このように、観光地としての国立公園は極めて政治的な空間でもあったのであり、本研究ではこの国立公園の政治性にも着目して考察を行うことにしたい。

以上の視点から本研究では、第1章1節において、和歌山県における観光地と都市の関係性の概要について、和歌山県の観光地のイメージや和歌浦および新和歌浦の観光地化に注目して検討する。また、第1章2節では、特に白浜温泉の形成に注目してこの観光地と都市との関係性を掘り下げることにする<sup>3)</sup>。第2章1節では、近代期に指定された吉野熊野国立公園について観光との関係性を確認し、第2章2節においては、吉野熊野国立公園と戦中期に国立公園候補地に取り上げられた金剛高野を事例に、観光地の政治的な側面について検討することとする。

## 第1章 観光地と都市

### 1) 和歌山県における観光地と都市の関係性

紀伊は奇異の國である、聞いて来て見て驚くばかり、まづ近頃特に世に知られた白濱は、古來人の良くいふ湯崎と、新舊相聯つて温泉の雙璧。入つて身も心も若くやわらぐ和歌山市から和歌ノ浦、新和歌とかけては名所の數々ある…山は熊野三山、川は瀨八丁、バスが驅ければプロペラも廻はる。高野山の名高いことは名詮自證、根來寺も亦懇ろに往いて訪ふべき値にあり…およそ西牟婁より東牟婁に互つて名所舊跡群がつて居り、汽車が走れば鳥が先駆け…嗚呼旅は紀州路、気に入つた！<sup>4)</sup>

これは、旅は紀州路社（和歌山県西牟婁郡田辺町）が昭和10(1935)年に発行した旅行案内『旅は紀州路』に寄稿された文章の一部を抜粋したものである。白浜温泉、湯崎温泉、和歌浦、新和歌浦、熊野三山、瀨峡、高野山をはじめとして、この文章ではここで抜き出した名所以外にも多数の和歌山県内の観光地を紹介しており（代表的な観光地については図1を参照）、それらを有する「紀伊」は「奇異」の國であると表現している。ここから、「聞いて来て見て驚く」ような「奇異」への関心というものが、当時和歌山を観光する人が求めたものの一つにあったことが伺われる。そして、このような観光客は何との差異を求め、具体的に観光地の何に注目していたのか、という点については『旅は紀州路』の序文で確認することができる。

旅は紀州路へ！ 旅は紀州路へ！ 今や都人を魅了してやまないのは紀州の旅路である。  
朗らかなサンデーの朝、親しきフレンドと、日本一の快速でカツとばす輕快な泉都旅情も楽し。  
ネオンに彩られた都の喧噪にサヨナラして、展かれゆく海岸美を心ゆくまで満喫しながら船路もなつかし。  
麗らかな陽光を銀翼に映して、紀の國の山々と、黒潮の美を謳ひながら、あの空の旅も断然愉快だ。  
旅は紀州路へ！ 旅は紀州路へ！  
山に温泉あり、海に温泉あり、しかも至るところ神跡名勝をもつて常春の國！ 南國紀州こそ、都會の刺戟と疲れと塵を洗ふ仙境であり、天下の樂土である。<sup>5)</sup>

ここでは、「今や都人を魅了してやまないのは紀州の旅路である」と、紀州を魅力的に感じる観光客の主体が都市住民として描かれている。そして「南國紀州こそ、都會の刺戟と疲れと塵を洗ふ仙境であり、天下の樂土である」と、都市の「刺戟と疲れと塵」を洗い流す場所であることがこの地の魅力であることが記されている。また、主にこうした都市の状況として対比されているのが、「紀の國の山々と、黒潮の美」という山と海の美、そし

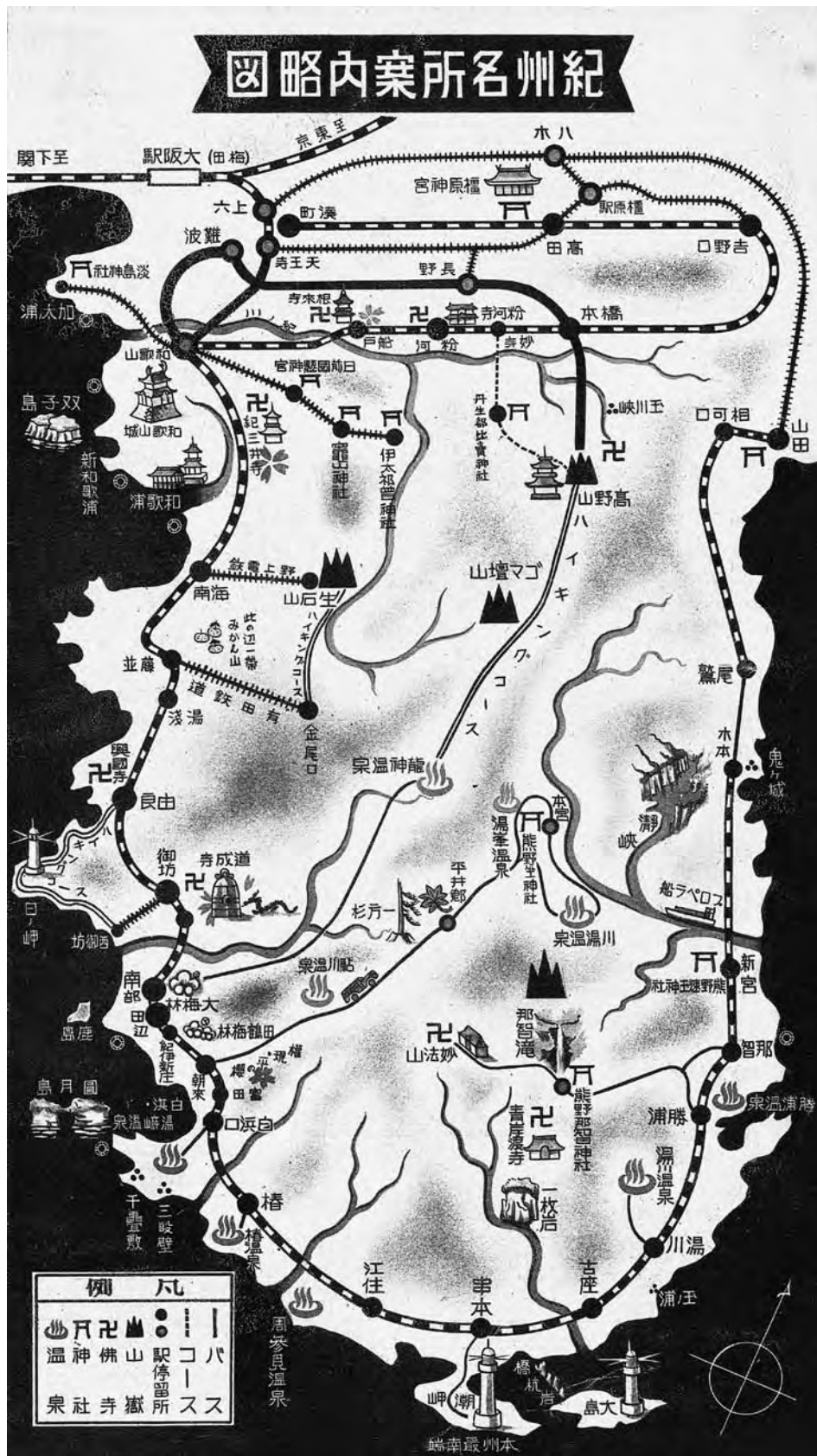


図1 近代期和歌山県の観光地位置概略図

資料) パンフレット「旅は紀州路」(発行: 紀元二千六百年記念観光事業協賛會, 発行年: 1940 [推定]) の添付図。

てその自然の中にある温泉、さらに「常春の國」や「南國紀州」と表現されている暖かさや南国という気候的な環境であったことも認められる。すなわち、紀州の魅力とは、当時の都市における様々な好ましくない状況との対比によって生じていたのであり、なかでも自然や温泉、そして気候の価値が見いだされるようになっていたのである。

また先の二つの引用の中には、バスや鉄道、そして船といった交通機関が描かれていることも確認できる。観光地としての魅力の形成と交通機関の発達とは密接に関係していたのであり、この点については大正15(1926)年発行の旅行案内における熊野に関する以下の文章が参考になる。

熊野の旅一と云へば、都人の眼には、アノ巍然と聳立つ嶮山と怒濤逆巻く絶海を聯想し、まるで地獄の旅する様な戦慄さを覚ゆる。熊野は好いとこ…まことに大自然に恵まれた樂園である、しかしこの樂園に遊ばんとすれば、まるで茨の様な道を歩まねばならぬ『禁断の樂園』實にそれであつた然しそれはもう十五年も二十年もの一昔二昔前で今の熊野—そこにはいつの間にか『禁断』の二字がはぶかれ、嶮山には縦横に自動車の爆音が轟き、今迄の恐ろしき一つであつた山嶽も愛でながらに運ばれ、絶海には千噸近き大船が浮かび是亦白鳥唄ふ黒潮の美を愛でながら運ばれる。そして天然の美しき樂園の熊野は都人士を日に日に吸収せしめて居る。<sup>6)</sup>

この記述では、交通機関の発達が苦痛であった旅路をいかに快適なものにし、「禁断の樂園」を「樂園」に変容したかが描かれている。大阪から和歌山への船旅は、明治17(1884)年には大阪商船が大阪から和歌山市まで接続し、明治20(1887)年になると神田汽船が大阪から紀伊沿岸を航海して愛知県の熱海まで運航していた。特に大阪商船は、各社を吸収合併しこの路線の覇権をにぎり、明治32(1899)年以降は三輪崎もしくは勝浦まで接続し、昭和2(1927)年に那智丸・牟婁丸という1600トン級の汽船を就航して多くの旅客を運ぶよう

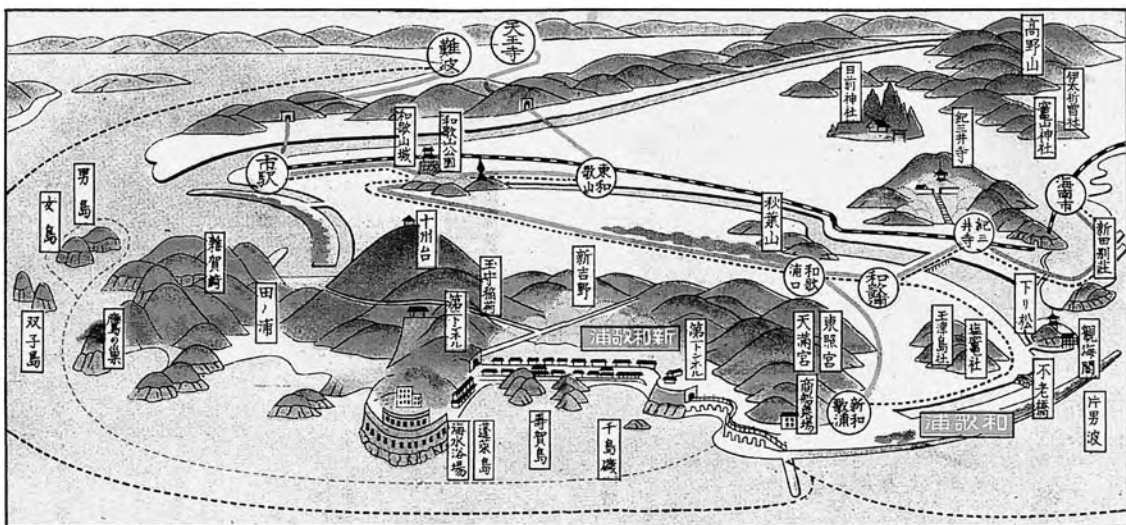


図2 新和歌浦と和歌浦の位置概略図

資料) パンフレット「新和歌浦」(発行: 保証責任新和歌浦旅館商業組合, 発行年: 不明) の添付図。

になっていた<sup>7)</sup>。また鉄道は明治36(1903)年に南海鉄道が難波－和歌山市間をつなぎ、大正8(1919)年に計画された紀勢西線は和歌山市から漸次路線を延ばし、昭和13(1938)年には新宮まで到達している<sup>8)</sup>。和歌山県における観光地の形成はこうした交通機関の発達に依存していたのであり、その魅力の発見とは都市的な人々の活動の空間の中に包含されることによってもたらされていたといえる。

このような観光客にとって日常的な近代空間への包含は、観光地それ自体においても行われている。この点を考えるにあたり、和歌山市の臨海部にある和歌浦と新和歌浦という観光地が参考になる（図2参照）。この地の観光地化の背景には、明治36(1903)年に南海鉄道が、昭和5(1930)年には阪和鉄道が和歌山市と大阪を鉄道で接続し、さらに明治42(1909)年には和歌山市の中心部から和歌浦まで市電で接続されるという交通機関の発達があった<sup>9)</sup>。この和歌浦は名所旧跡を多数有し、片男波という海水浴場もあったため、「和歌の浦は電車開通後御申越の如く大阪地方より行くもの著しく増加仕候」（『和歌山新報』明治42年6月19日）といわれたように、交通機関の発達に伴い大阪からの観光客が数多く訪れるようになっていた。こうした状況のなかで、明治42(1909)年に「水族館及び海水浴場、釣魚、ウォーターシュート噴水器其他の遊技場を建設」することを目指した南海遊園株式会社の設立が企図されている（『紀伊毎日新聞』明治42年3月24日）。さらに明治43(1910)年には、奠供山の麓の望海樓旅館が、「東洋一と呼ばれた屋外エレベーターを建設」していた<sup>10)</sup>。しかしながら、南海遊園の事業は和歌浦の風致を害するという理由で県に認可されず<sup>11)</sup>、望海樓の屋外エレベーターは大正5(1916)年に取り壊されてしまっている。このエレベーターについては、奠供山が「聖武、称徳、桓武三帝の御臨幸」ある「我国希有の霊場」であるためそれは「我歴代の天皇の御遺志に背反する大不



図3 新和歌浦第一トンネルの絵はがき



図4 新和歌浦における旅館群の絵はがき

敬罪にして、極悪事たるなり」などと批判が絶えなかったことが確認される<sup>12)</sup>。このように、歴史的背景などによって和歌浦では観光客向けの近代的設備が発達せず、戦前期においては観光地としての発展がそれ以降みられることがなかったのである。

こうした状況の中で、和歌浦の西側で観光開発されたのが新和歌浦である。明治43(1910)年に森田庄兵衛が新和歌浦の開発に着手し、明治44(1911)年には第一トンネル(図3)を掘削して新和歌浦遊園を完成させている。大正2(1913)年には市内電車も和歌浦口から新和歌浦まで開通し、大正6(1917)年には森田庄兵衛が中心となり新和歌浦土地株式会社が設立され、大正13(1924)年に森田が死去した後の大正15(1926)年には、和歌山市を郷里とする谷井恭吉が社長を務める南海遊園が設立されている。同社は「京阪神地方民をひきつけるため宝塚、香櫨園の如き一大遊園地」を創設する事を目的とし(『紀伊毎日新聞』大正14年10月28日)、「旅館、料亭、鹽湯、食堂、海水浴場、土産物屋店等新時代的総ての施設が完備して居る」<sup>13)</sup>南海遊園を設立している。また、和歌浦の望海樓旅館が新和歌浦へと移転したことをはじめとして、新和歌浦の海岸沿いには数多くの旅館が建設されていった(図4)。こうして近代的施設を整えた新和歌浦は、昭和7(1932)年には「年々百万以上の遊覧客を吸引している新和歌浦」(『大阪朝日新聞和歌山版』昭和7年2月27日)といわれるまでになったのである。このように、観光地化には快適な都市的空間を創設する近代的観光開発が重要であったことがわかる。



## 2) 白浜温泉の形成

以上のような都市との関係性にもとづく観光地化は、本章冒頭の引用で「近頃特に世に知られた白濱」として紹介されている白浜温泉を検討することで、よりはっきりと理解することができる。白浜温泉とは、和歌山県南方の半島部に位置する（図1参照）、大正8(1919)年以降に開発が進められた温泉場である。この地の隣には、日本書紀に「牟婁の温湯」として記載された「崎の湯」を有する古くからの温泉場の湯崎温泉があり（図5参照）、戦前期にはしばしば両者をあわせて「湯崎白浜」もしくは「白浜湯崎」と呼ばれていた。この地の都市住民にとっての意義を、昭和7(1932)年6月に大阪毎日新聞社和歌山支局主催開催された『白浜湯崎を語る会』という座談会において、ある大阪在住者が以下のように述べている。

われわれ都会人は日夜経済上その他の問題で頭を悩まされている、都会人はまさに精神病にならうとしている、この都会人を健全にするものは、医者もあらう、薬もあらうが、まづこの温泉を最上のものと考へる…壮大なる風景などは一切を算盤化せんとする都会人の精神を休めるに最も適当したものと嘆賞するもので当地は実に都会人のお乳母さんであり都会人の後見人であり都会人の母としての使命を完全に有する温泉として賞賛するものであります。

（『大阪毎日新聞和歌山版』1932年6月21日）

ここでは、「都会人はまさに精神病にならうとしている」とされ、「都会人の精神を休める」ために、温泉や壮大な風景がある白浜湯崎が都会人にとっての「お乳母さん」、「後見人」、「母」であることが指摘されている。そしてこの都会人の精神病とは、「日夜経済上その他の問題で頭を悩まされている」ことによって生じているとされ、白浜湯崎の価値とは主に都市の「労働」との対比で見いだされていたことがわかる。こうした認識は、昭和8(1933)年に出版された白浜湯崎の案内書の記述においても確認することができる。

白濱湯崎は京阪神に最も近き名郷で夙に我が國の温泉の権威として又遊覧の勝地としてその名が全國に普く鳴り響いて居る。蓋し白濱湯崎の温泉はその成分が優秀であつて疾病を醫し身體の强健を保全する天賜の良劑を多量に含有してゐる為であらう。しかも前に一望萬碧の熊野洋に洗れ後には山容美に富む群峰に抱かれ遙かの南東には熊野三千六百峰の玲瓏たる靈姿を仰ぎ山岳美にも海洋美にも目を拭はすやうな明媚な景觀に接す更に旅館や交通機関の整うて居る點から見ても優に天下に冠たるものである。何しろ一度白濱湯崎に遊んだ人は「こんな温泉郷が大阪付近にあつたのか」と一驚を喫するのは無理でない。事実確かに良い。清浄な空氣と太陽の紫外線から遮断され騒音と煤煙の下でビジネスビジネスと仕事の重壓の下で働いてゐる人々にとつては真に人生の樂園である。激しい現代の思想の渦巻の中に居る私達には少なからぬ驚異でありそれだけに白浜湯崎といふ處が都会の刺激に疲れ切つて居る人の心をどれだけ撫でさすつてくれるかが考へさせられるのである。<sup>14)</sup>





図6 白良浜の絵はがき

道西線建設計画が発表された年であった。また、白良浜土地建物株式会社の事業には、大阪商船と南海・阪和両電鉄が資本参加しており、宣伝のバックアップも行っている。これらのことから、白浜温泉の開発の端緒には交通機関の発達が密接に関係しており、鉄道の南下を想定して大阪を中心とした都市からの観光客誘致を当初から企図していたことが伺われる。その事業内容も、社名を白良浜土地建物（大正8年）→白浜温泉自動車（大正12年）→白浜温泉土地建物（昭和6年）→白浜温泉土地（昭和7年）へと変更しているように、鉄道の敷設状況に対応させつつ建物経営から温泉・自動車経営へ、そして温泉・土地・（建物）経営へと展開しており、必要に応じて交通業も営んでいたことが確認される<sup>15)</sup>。

また温泉場の売り出し名となった「白浜」も、大正10(1921)年に白浜土地の依頼により杉村楚人冠らが「白良」の名を考案していたが、同じ頃南海鉄道が慣用化した「白良浜」の略称「白浜」が一般に浸透したこと<sup>16)</sup>、そして土地会社が追認する形で大正12(1923)年から社名に「白浜」を掲げたことで定着している。すなわち「白浜」という名は、鉄道会社とそれに歩調を合わせた土地会社によって、大阪を中心とした都市住民の感性を考慮に入れつつ生み出されていたのである。その後、昭和8(1933)年にこの地に鉄道が到達したが、その駅名が「白浜口」となったことで、「湯崎白浜」や「白浜湯崎」などと呼ばれていた温泉地一帯が、次第に「白浜」と呼ばれるようになっていった。そしてこの白浜の白さのイメージは、昭和8(1933)年に大阪毎日新聞に連載された牧逸馬著の恋愛小説「新しき天」において、主人公の女性が白良浜の砂を「まあ！何てきれいな砂！まつ白なー。」（『大阪毎日新聞』1933年6月28日）などと賞賛しているように、観光客の憧れを喚起するものとして定着していったのである。

加えて、交通機関の発達は大阪から白浜へ旅客を運ぶだけでなく、そこでの遊覧と

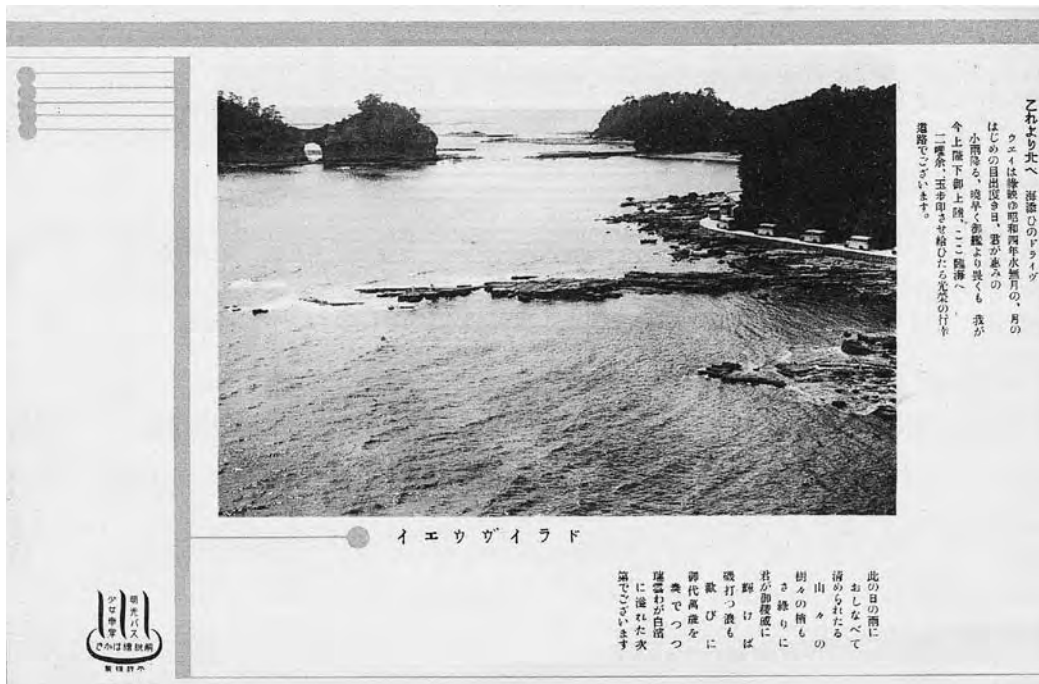


図7 臨海部の道路を走る乗り物と自然景観（円月島）の絵はがき

も密接に結びついていた。昭和9(1934)年には、昭和5(1930)年に白浜温泉自動車株式会社の自動車部が分離独立した明光バスが、この地に遊覧バスを走らせている（図5参照）。この遊覧バスによる観光については、例えば以下のような記述がなされている。

ヴェレ帽に、いと軽やかなスカートを微風になびかせて、バスガールの流す銀鈴のやうな聲に、やがて車窓に描き出される白濱―「雪の色におなじ白良の濱千鳥、聲さへ冴ゆる曙の空」バスガールの詠歌に、車中の人々の瞳は、憧れと感激に燃えるのでした。「まあ、お白粉のやうね！」ある美しい都會のマドモワデルは、牧逸馬の小説の女主人公そのままの賞讃を放ちました。遊覧車は斯うして、バスガールの情緒でんめんたる説明振りに聞き惚れ、無限の悦びに胸高鳴らすお客をのせて坦々たる海岸道を亘つて行きます。「あれ！あんな島が！」車窓に映えた風景に乗車の一人は思はずコウ言ひながら驚異の眼をかがやかししました。バスガールの説名はひとぎわ聲をはりあげてその驚異の謎を解かれるのでした―「向ふに浮ぶあの岩は、圓月島、眼鏡岩とも申します。春は遊覧の島巡り、夏はうれしい夕涼み、四季折ふしのドライブは、あかぬ眺めともろ共に浮世の塵をうち拂ふ、うれしい遊びで御座います！」<sup>17)</sup>

このように、観光客は都市住民の感性にあわせたバスガイドの解説を聞いたりしながら、乗り物の中から白浜の自然景観をまなざしていたのである（図7）。まさに、都市で慣れ親しんでいる快適な近代的空間に包含されながら、他所を消費していたといえるだろう。

また、白浜における都市的な空間の創造は、特に土地会社による観光開発によって推進されていたことが確認される。白良浜土地建物株式会社の土地開発計画は、国立公園計画にも深く関わった本多静六によって、大正10(1921)年に作成されている<sup>18)</sup>。彼は、白良



図8 白浜館の絵はがき

浜との類似性から遼東半島膠洲湾青島のドイツ人が創出した海水浴場に注目し、脱衣場や水被り場、そして海岸の洋式ホテルや音楽堂といった近代的周辺施設を提起している。さらにいくつかの欧米におけるリゾートを参考に、室内遊泳場を備えた公共大温浴場、洋式ホテルを加えた「洋式建築群」、そして天然植物園、水族館、教育動物園などの諸施設も提言している。また、「欧米先進国の各種都市に於ける道路公園広場」を参考に製作した実際の土地開発予定図にも、野外劇場、美術館、図書館、公会堂、動物園などといった諸施設を組み込んでいた。土地会社は本多の土地開発計画における道路網をほぼ踏襲しながら、別荘地中心のリゾート開発を行っていった。こうして都市的な近代的空間が、欧米のリゾートを参考にした本多の計画を基にして出来上がっていったのである。

具体的な施設としては、土地会社が大正11(1922)年に「白浜館」という大阪あめりか屋建築の和洋折衷の豪華な近代旅館(図8)を創設したのを皮切りに、他の様々な資本により近代的な旅館が数多く創設されている。さらに、昭和4(1929)年夏に海水浴場、昭和6(1931)年にベビーゴルフ場、昭和7(1932)年に日本で二番目のサンドスキー場、そして昭和8(1933)年にテニスコートが創設されるなど、欧米からもたらされた近代スポーツのための空間が作り出されていった。加えて、昭和8(1933)年には土地会社が娯楽施設として白浜ホールを建設しており、その宣伝には以下のように記されていた。

モダン—泉都白濱に、てもふわはしい彩りをもつて近代都人の趣味性に迎合して居る白濱ホール！

皆様御存知でせうか？

その日歸りの白濱遊覧には、最も輕快で經濟的で、しかも十分白濱氣分を満喫出来、また退

屈な温泉生活には無くてはならぬ「悦楽の殿堂」です。

都會のお疲れと塵をサツと流す清麗なお湯があります。

白砂から寄せる爽やかな微風の明るいお部屋には、凡ゆる娯楽の設備があります。華麗なデコレーションの大ホールでは、綺麗な音楽に耳傾けながらいとも朗らかな宴會が出来ます。

新鮮な材料の純フランス式お料理は、斷然飲めます。

酒場のソファ―情緒もきつとお氣に召します。

山に近いヴェランダは、四季の花も咲けば、戀の花も咲きます。<sup>19)</sup>

白浜の近代的施設たる白浜ホールとは「近代都人の趣味性に迎合」したものとされ、「微風の明るいお部屋」や「華麗なデコレーションの大ホール」を備えたものであった。そして、「純フランス式お料理」、「酒場のソファ―」、「ヴェランダ」など、そこには西洋への憧れが投影されていたことが確認される。以上のように、白浜の近代的な空間形成とは、観光客が過ごしやすい日常的な都市的空間に包み込まれることであると同時に、憧れの西洋という他所を想起させることでもあったのである。

## 第2章 観光地と国立公園

### 1) 吉野熊野国立公園の指定と観光

日本歴史の第一頁から我等に親しみ深い紀州熊野路、名づけて、旅は紀州路へ  
それは人々の胸にそぞろに旅を思はせる響がある、そのがみの雅かな牟婁のいで湯の行幸、  
平安の都よりはるばる三熊野への御参籠さては笈摺を肩に山伏野伏が熊野の山々の荒修行、  
又西國三十三番の憐れも深き巡禮、聖域高野山の神秘など、星の移りの變りにもたゆる事なく  
旅こそは紀州路へ！

さればすぐれた造化の妙は限りなき歴史の装をこらして旅心をそそる

そこには史蹟があり、傳説があり、奇勝があり宗教がある、温泉が湧き絶景がある、詩が  
生まれ唄が歌はれる

休暇の一日二日を一週間を避暑に海水浴に史蹟を尋ねて探勝に、遊覧に神詣でに入湯にち  
よつと一足紀北を訪ね紀南を渉つて！！<sup>20)</sup>

これは、紀元二千六百年祭記念観光事業協賛會が発行した「旅は紀州路」と題されたパンフレットの一文である。昭和15(1940)年の紀元2600年の頃の紀州観光を紹介したこの文章を見ると、「日本歴史の第一頁から我等に親しみ深い紀州熊野路」と歴史性が強調され、温泉ばかりでなく熊野や高野山といった史蹟が非常に注目されていることがわかる。

このような状況について、特に熊野に関しては以下のような指摘が参考になる。

国立公園の指定と紀勢中線の延長は長く忘れられてゐた熊野を一時に著名な観光地としてしまつた。此の二三年に於ける旅行関係の各雑誌は熊野の風物に就て多くの頁を與へその紹介に努めてゐる。事實熊野の一带は海岸に、河川に、温泉に、史蹟に他の国立公園に優るとも決して劣らぬ多くの特徴を持つ我が國一流の風景地である。潯八丁のみを以て知られてゐた一带が如何に傑れた風景地であるかは全ての観光客が驚嘆する處であり年々増加する観光客の数はその魅力の如何に大きいかを物語つてゐる。伊勢と共に熊野詣として國民の信仰を厚くした三社詣は、往昔程の盛殷を見ることが出来ぬにしても国立公園の指定が三社を中心として一带の風向の探勝に國民の興味をひきつゝあることは熊野一带の人々にとつては大なる喜びであり、それ丈に地元民が観光客に對する感念も亦他にみられぬ眞剣さを持つてゐることは我々としても喜ばしいことである。<sup>21)</sup>

昭和11(1936)年に記されたこの文章では、国立公園の指定と交通機関の発達により熊野が有名な観光地となつたことを記している。この国立公園の指定とは、昭和11(1936)年2月1日に、奈良県（吉野郡7ヶ町村）、三重県（多気郡・南牟婁郡13ヶ町村）、そして和歌山県（新宮市及び東牟婁郡・西牟婁郡22ヶ町村）にまたがって指定された吉野熊野国立公園のことを指している（図9参照）。そして吉野熊野国立公園の観光地としての役割は、昭和14(1939)年の文章において下記のように記されている。

京阪神就中阪地の市民は、その不衛生なる雑踏生活に煩悶し憂鬱となつてをる。されば大阪鐵道局や三都市の郊外電車は彼等の慰安を計り併せて自己の營利のため…郊外の旅行を大々的に宣傳してをるが、その効果は觀面、休日に押な押なの渦巻は、誠に驚かざらんとするも得ない有様で、如何に三都の市民が大都會の過群生活に凝り凝りしてをるかが一目でよく判るのである。

この時にあたり、わが吉野熊野国立公園が颯爽と登場し、莞爾として彼等を迎へることとなつたのは特筆すべき事柄であり、しかもその交通は、年一年と改善せられつゝあるのは喜ぶべき事といはなければならぬ。<sup>22)</sup>

ここでは「不衛生なる雑踏生活に煩悶し憂鬱となつてをる」京阪神の都市住民を迎える地として吉野熊野国立公園が登場したことが記されている。ここから、白浜温泉のように、吉野熊野国立公園も都市との差異からその魅力が生じていたことが伺われる。本章最初の引用文で熊野が注目されている理由には、交通機関の発達と国立公園への指定によって新たに生じた観光地になっていたことがあつたのである。

この吉野熊野国立公園については、「火山に縁遠い地としては珍しくも數多の温泉（勝浦・湯川・湯ノ峯・川湯等）を包有し、これ等が白濱、湯崎、椿、龍神等の四近所温泉と相呼應して旅客に慰安と保養とを供してゐることもこの国立公園の強味の一つである」<sup>23)</sup>といった点も指摘されている。このように、観光客の「慰安と保養」という点で地域内および近隣の温泉場と連携ができるという発想があつたのであり、それは各地の温泉場



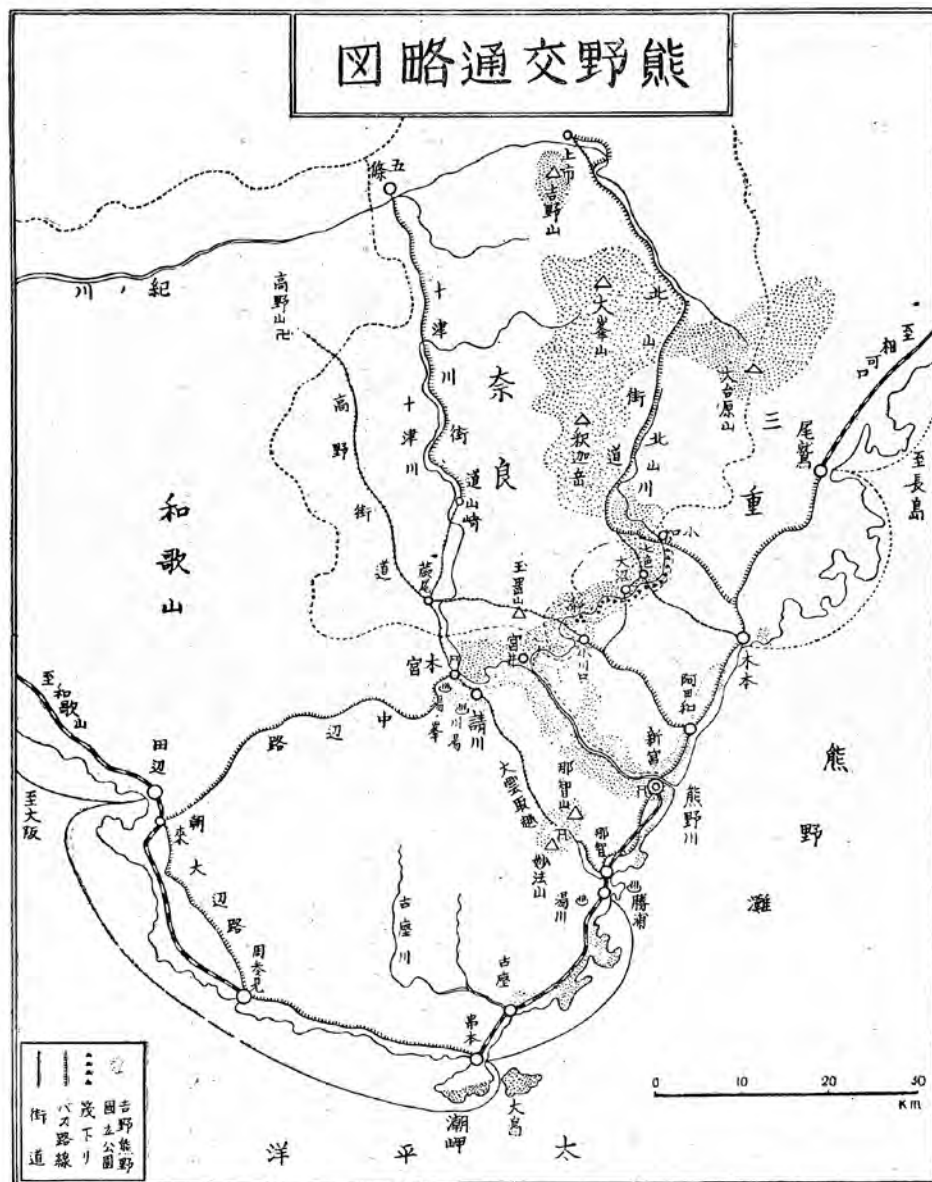


図9 吉野熊野国立公園概略図

資料) 汐崎慶三編『熊野紀行解説』，新宮市教育會，1938。

にとっても同じであった。例えば白浜湯崎観光協會も、昭和16(1941)年にガイドブックとして『熊野観光と白浜湯崎』を発行し、国立公園に選ばれた熊野地域も含めて紹介していることが確認される。ただし、同じ都市住民にとっての観光地といっても、白浜と国立公園になった熊野ではその位置づけが異なっていたことも認められる。例えば、昭和8(1933)年に、和歌山県の本宮、古座、三輪崎、那智、白浜の5つの地域を吉野熊野国立公園に含めるか否かの議論<sup>24)</sup>されているが、白浜以外の4地域がほぼ国立公園に含まれることが決定する中で、国立公園の選定に重要な役割を果たした田村剛が「将来は歓楽地として発達せしめねばなら」ないといった理由で白浜を国立公園の候補地から外している。すなわち、国立公園とは歓楽地とは異なるような観光地化が指向されていたのである。



## 2) 和歌山県における国立公園（候補地）とその政治性

ここで戦前期における国立公園について簡単に確認しておきたい。日本における国立公園の選定へ向けた動きは、明治44(1911)年の第27回帝国議会で「国設大公園設置に関する建議」をはじめとする国立公園の設置に関する3件の建議・請願が採択された頃から活発となっている。その後、大正9(1920)年からの内務省衛生局保健課による国立公園調査、昭和2(1927)年の衛生局内での国立公園協会の設置、昭和5(1930)年の国立公園調査会の設立、昭和6(1931)年の国立公園法の公布と事業が進展し、昭和7(1932)年に国立公園委員会は12の候補地を決定した。そして、昭和9(1934)年と11(1936)年に、阿寒、大雪山、十和田、日光、富士箱根、日本アルプス、吉野・熊野、大山、瀬戸内海、阿蘇、雲仙、霧島という12箇所の国立公園が順次指定されている。

こうした動きは、国と地方の観光振興への取り組みと密接に関わっていると同時に、「国家や国民のアイデンティティを示すナショナリズムと、きわめて親和的な風景」として、特に「山岳や溪谷、森林」の風景が国立公園として選び出されていたことが指摘されている<sup>25)</sup>。ただし、吉野熊野国立公園については、若干その様相が異なっていたことが確認される。吉野熊野国立公園の選定を機に、和歌山県は『国立公園の知識』<sup>26)</sup>と題する書物を発行し、その中で同国立公園についての解説をおこなっている。そこに記された吉野国立公園の特色は以下の4点である。

1. 本邦十二国立公園中唯一の水成岩系に属する大風景地なること。
2. 山岳、河川及海岸美を兼ね具へたる大公園なること。
3. 我國建國以来の貴重なる靈地、史蹟の豊富なること。
4. 近畿地方に在りて公園の利用上最適なる位置に存すること。

まずこのうちの1と2について考えてみたい。当時の国立公園の多くが火山風景であったことから、吉野熊野国立公園は水成岩からなる風景であることが特徴あるものとされているが、そこでは山岳や河川のみならず海岸美が注目されていることが確認される。また「景観美概要」の項目においては、山岳として取り上げられているのは大臺ヶ原山や大峯山脈といった吉野群山だけであり、熊野については海岸風景（図10、図11）と熊野川流域の瀨峡を中心とする溪谷美（図12）についての言及のみとなっている。すなわち、熊野とは溪谷の風景はあるものの必ずしも山岳的な風景が注目されていたのではなく、むしろ海の風景がその特徴とされていたことがわかる。こうした認識は、以下のこの地の解説からも確認できる。

大峯山脈および大臺ヶ原山の重疊たる山岳地帯を有する外、いはゆる熊野灘と稱する南紀州一帯の海岸を抱擁してをりまして、山岳の立體的な美と海洋の澎湃たる景観とを併せ有し、しかもこれをつなぐのに狭谷の美を織り込んでゐるといふ、三大要素から成り立つてゐると

いふ事が出来ます。…瀨の美観は、山中で瀧と飛び、瀬と碎け、更に黒潮渦巻く太平洋に濺ぐ水の廻る過程において、一時的に「静止」の状態を示したもので、しかもこの「瀨八丁」は、単に水の美許りでなく、それを取り巻く岩石と、森林の美を併せ織り込んだもので、国立公園としての「吉野群山と熊野」の持つ、最大の誇りの一つであります。…黒潮踊る熊野灘の雄大な景色は、海國日本の代表的な景色である…<sup>27)</sup>



図10 橋杭岩の写真

資料) パンフレット「国立公園熊野めぐり」(発行: 熊野自動車株式会社, 発行年: 不明)。



図11 潮岬の写真

資料) パンフレット「国立公園熊野めぐり」(発行: 熊野自動車株式会社, 発行年: 不明)。

ここで熊野の海岸風景を「海國日本の代表的な景色である」としているように、こうした海の風景というものが、吉野熊野国立公園ばかりでなく、当時の日本の国立公園全体の風景認識の流れの中で見いだされたものであった。国立公園の選定において、当初は海岸風景は選定される方向にはなく、吉野熊野国立公園に該当する地域においても大臺ヶ原や大峯山といった山岳のみが候補にあがっていた。しかしながら昭和6(1931)年8月には「国立公園の設定に就ては山岳美や湖沼の美を中心とする勝景地のみに偏することなく廣く海洋の美を抱擁する地域を選定すべしという輿論は相當強く年々帝國議會に提出さるる」状況に対応し、瀬戸内海の調査がはじまっている<sup>28)</sup>。この流れの中で、昭和7(1932)年9月の国立公園委員会特別委員会において「吉野及熊野」という熊野を含んだ地域選定<sup>29)</sup>がなされたのである。吉野熊野国立公園が選定された時に、日本の国立公園選定で重要な役割を果たした田村剛が「熊野海岸は本邦の外洋に面する海岸風景の白眉である。それは海國日本が誇るべき雄観である」<sup>30)</sup>といているが、自然風景と結びついた日本のアイデンティティの中で、山岳国だけでなく海国という考えが反映された国立公園風景として熊野は位置づけられていたのである。

次に3については、「靈地、史蹟その他」の項目において「熊野は神武天皇御東征の際御親征の第一歩を記されたる地」であることが特に強調され、「熊野の歴史にして熊野三山と没交渉なるものは殆んどなく、上古より靈驗あらたかなる大社として、歴代天皇の厚く御尊崇遊ばされた」ことが記されていることが確認される。こうした建国以来の歴史性を重要視した認識は、この国立公園の特徴としてしばしば強調されている。例えば「吉野群山と熊野」と題された昭和8(1933)年の文章では、以下のように指摘がなされている。



図12 瀬峡の絵はがき

この地域が国立公園として選ばれた理由は多々あると存じますが、全国の国立公園と比較して、最も優れた特徴といふのは、わが国の建國以来、幾多の歴史に深い関係を有してゐる事だと思ひます。…攝津の海岸に御上陸になりました神武天皇の御一行が、直接大和にお入りになる事が出来ず、道を轉じ、海路紀州に向はせられ、同地から道臣命を嚮導とされて吉野にお出ましになつた御堂筋といふのが、今日の「熊野」から「十津川」を経て山岳重疊たる吉野郡山を経て、幾多困難難辛苦を嘗めさせられて遂に大和平野に出でさせられたのであります。<sup>31)</sup>

国立公園の風景がナショナリズムと関係があったとの指摘を行ったが、特徴とされた「わが国の建國以来、幾多の歴史に深い関係を有してゐる事」の強調はまさに国立公園とナショナリズム高揚との結びつきを示すものである。特に熊野については、昭和11(1936)年に脇水鐵五郎が以下の「吉野熊野国立公園概説」において、熊野の海岸までも神武天皇と結びつけ、この地の国立公園の意義を国民教化のための重要地であることを論じている。

本国立公園の海岸部をなす熊野浦は大平洋岸に於ける最も偉大なる海岸風景地であると同時に風景の形式上大平洋式の典雅優美に加ふるに日本海式の豪壯怪奇を以てし、風景の變化に富んで居る點では日本で唯一無二のものと言へやう。加ふるにこの海岸は神武天皇御東征の際の御上陸地點として知られ、わが建國の歴史と極めて關係の深い由緒地であるのみにならず、畏くも中朝歴代の天皇が御崇敬の最も厚かつた熊野三社がこの地に鎮座せられ、国民教化上の重要地であることがこの国立公園設定の意義して一層重大ならしめてゐると言へる。<sup>32)</sup>

こうしたナショナリズム高揚につながる歴史性の高揚は、戦時体制に入っていくにつれてとりわけ強調されるようになっていった。吉野熊野国立公園協会の岸田日出雄は、「昭和十四年の吉野熊野国立公園」と題した文章の中で以下のように論じている。

国立公園は及ぶ限り雄大崇嚴神秘の状態を保たしめ此處に来る者をして平素多く経験せざる靈感を享受せしむると同時にその嵐氣に觸れしめて心身鍛鍊の場所たらしめなければならないのである。

かくして喧噪焦慮の生活にあつて其の健康を脅かされつゝある都人士を救ひ、その心身に慰安を與ふると共に活動のエネルギーを附與する事となるのである。

...

諸外國の国立公園は心身の慰安と鍛鍊を其の全使命となすのであるが我國立公園はその上に尚重大たる使命がある。即ち入園者を神社佛閣や聖蹟史蹟等に觸れしめて精神修養の聖壇たらしめる事であつて、實にこの事が萬邦に卓越する我國立公園の特異性である。

...

實にわが吉野熊野国立公園の任たる健全なる日本精神の作興に寄與する所多大であつてなは

等しく国立公園なりと雖も其の實は天然道場と呼ぶことの妥當にあらずやとさへ思考せらるゝ次第である。

今や國家非常の時局に相遇し皇國精神の昂揚、健全なる身體確保の最も喫緊なる時に當り我が吉野熊野の使命は更に愈々重大である。<sup>33)</sup>

彼は、国立公園が「心身鍛錬の場所」でありそこが「喧噪焦慮の生活にあつて其の健康を脅かされつゝある都人士を救ひ、その心身に慰安を與ふると共に活動のエネルギーを附與する」ことを論じるが、さらに日本の国立公園の特徴として「入園者を神社佛閣や聖蹟史蹟等に觸れしめて精神修養の聖壇たらしめる事」があると指摘している。そして吉野熊野国立公園の任務に「日本精神の作興に寄與する」ことを挙げ、「皇國精神の昂揚、健全なる身體確保」に資することを論じるのである。すなわち、ナショナリズムの高揚と戦時体制下における身体訓練のために国立公園の価値が見いだされるようになったのであり、そのなかで国家の政治と結びついた歴史性の強調が特になされるようになっていったのである。吉野熊野国立公園の特徴の4番目に取り上げられていた都市部との近接性は、こうした国立公園の作用にとって重要な意味を持つのであり、このような状況のなかで、本章冒頭の引用にあるような歴史性に注目した紀州路の旅が昭和15(1940)年に提案されるようになっていたのである。

以上のような傾向は、本章冒頭の文章で同じく焦点があてられていた高野山でも同様であった。戦中期の昭和17(1942)年に、青少年の錬成という国策に対応して、都市人口が多い地域の周辺に新たに6つの国立公園候補地が計画された<sup>34)</sup>。その候補地とは、秩父、大島天城、琵琶湖、志摩、金剛高野、耶馬溪英彦山であり、高野山は大阪の金剛山と共に候補に選ばれていた。この国立公園候補地としての高野山について、以下のような指摘がなされている。

海内屈指の靈場として千百年にも餘る長い歴史を持つ高野山は、大忠臣楠公縁の地金剛山と共に、國民錬成を主眼とした新使命を負ふ国立公園として指定を受くる待望の日も早や遠くはないと聞く。…今や高野山が現在及將來に於ける我興隆日本を雙肩に擔つて立つべき皇國民の錬成場として堂々の登場を見んとすることは、此地が我國の古き佛教の靈場たるに加へて更に新しい重大なる使命を附託せられた譯で、靈学の現代的復活乃至は新発足として大に慶すべきことといはなくてはなるまい。殊に我國經濟活動の心臓部たる商工都大阪を距る僅々二時間の乗車行程に過ぎぬ至近の地に、高野山のごとく錬成道場としての諸条件が殆んど申分なく完備した良候補地が見出されたことは、將來活用の方面から見て誠に至幸至便である…<sup>35)</sup>

このように高野山はナショナリズムと親和的なその歴史性に加え、都市との近接性から有用な國民たるための健全な身体錬成の場として位置づけられていったのである。すな

わち、熊野や高野観光への戦中期における注目は、国立公園という制度とも関連しながら、ナショナリズムの高揚や身体錬成を求めるような当時の社会情勢と密接に結びついていたのである。

注)

- 1) アーリ、J. (加太宏邦訳)『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』、法政大学出版局、1995。
- 2) ブーアスティン、D. J. (星野郁美・後藤和彦訳)『幻影の時代—マスコミが製造する事実—』、東京創元社、1964。
- 3) 和歌浦と新和歌浦については、神田孝治「近代期における和歌山市の観光都市化の過程とその背景」(『第9回 「観光に関する学術研究論文」 入選論文集』財団法人アジア太平洋観光交流センター、2003) 1-14頁で、白浜温泉については、神田孝治「南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性—近代期における観光空間の生産についての省察—」人文地理、2001、vol.53 (5)、24-45頁で、既に詳細な報告を行っている。本研究の内容は基本的にこれら論文に含まれているものであるが、本報告にあたって収集されたものを中心とする新資料を用いるなかで、都市との関係性を軸に既存論文の内容補強するものとなっている。
- 4) 谷本梨庵「思ひ出づるままに」(並木 茂編『旅は紀州路』、旅は紀州路社、1935)4-5頁。
- 5) 並木 茂編『旅は紀州路』、旅は紀州路社、1935。
- 6) 並木 茂編『紀の国礼讃』、並木 茂(個人出版)、1926、付録1-2頁。
- 7) (1) 神田外茂夫編『大阪商船株式會社五十年史』、大阪商船株式會社、1934。(2) 和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史—近現代—』、和歌山県、1989。
- 8) 前掲7) (2) 参照。
- 9) 和歌山市史編纂委員会編『和歌山市史 第3巻 近現代』、和歌山市、1990。
- 10) 浜口彌編『新和歌浦と和歌浦』、枇榔助彌生堂、1919。
- 11) 高嶋雅明「近代の開発と和歌浦」、和歌山地方史研究17、1989。
- 12) 前掲11) 参照。
- 13) 吉田初三郎『新和歌浦一名所交通鳥瞰図—』、観光社、1927。
- 14) 原静村『日本一の温泉郷 白浜湯崎の美を語る』南海新聞社、1933。
- 15) 湯川宗城『明光バス三十年史』明光バス株式会社、1958。
- 16) 前掲15) 参照。
- 17) 前掲5) xxx-xxi頁参照。
- 18) 本多静六「紀州白良温泉場白良浜土地建物株式会社経営地設計図説明書」(雑賀貞次郎編『白浜・湯崎 温泉叢書 科学文献篇』、南紀の温泉社、1932)114-134頁。

- 1 9) 前掲 5) xxxii頁参照。
- 2 0) パンフレット「旅は紀州路」(発行: 紀元二千六百年祭記念観光事業協賛會、発行年: 1940 [推定])。
- 2 1) 千家哲麿「熊野の海岸」、国立公園8(8)、1936、22-25頁。
- 2 2) 岸田日出男「吉野熊野ハイキングコース」、国立公園11(3)、1939、25-28頁。
- 2 3) 脇水鐵五郎「吉野熊野国立公園概説」、国立公園8(3)、1936、11-13頁。
- 2 4) 『和歌山日々新聞』1933年4月18日。
- 2 5) 荒山正彦「自然の風景地へのまなざし—国立公園の理念と候補地—」(荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』、古今書院、1998)128-142頁。
- 2 6) 和歌山県編『国立公園の知識—附 関係法規及例規』、和歌山県、1936。
- 2 7) 藤木九三「国立公園を語る (二)—吉野群山と熊野—」、国立公園5(3)、1933、13-15頁。
- 2 8) (雑報)「海洋国立公園候補地視察」、国立公園3(9)、1931、25頁。
- 2 9) 村串仁三郎『国立公園成立史の研究—開発と自然保護の確執を中心に—』、法政大学出版局、2005。
- 3 0) 田村 剛「十和田、富士箱根、吉野熊野、大山各国立公園の特色とその将来」、国立公園8(3)、1936、1-3頁。
- 3 1) 前掲27) 参照。
- 3 2) 前掲23) 参照。
- 3 3) 岸田日出男「昭和十四年の吉野熊野国立公園」、国立公園11(4)、1939、12頁。
- 3 4) 国立公園協会編『日本の国立公園』、国立公園協会、1951。
- 3 5) 小川由一「高野山と森林」、国土と健民15(1)、1943、20-22頁。